

ここから これから

NPO法人 北海道 NPO サポートセンター  
2020年2月号 [季刊発行]

Vol.  
4

# からから 便り



江別市世田ヶ谷地区にあるバス停。中央バスの札江線（江別駅前—札幌ターミナル）にあり、平日は1日8本運行している。



今も変わらず厳しい冬を迎える江別市世田ヶ谷地区

道内避難者心のケア事業 **交流会のご報告**

**避難元からの情報** ～福島県からのお知らせ～

本州と北海道 北海道開拓の歴史から  
**江別市・世田ヶ谷地区**

寄稿 「1ページのたより」  
**ももちゃんは逃げてきたんでしょ？**

ここから これから からから相談  
**「もしも」の時の予備知識**

**北海道における被災避難者の受入状況**

編集後記

# 交流会のご報告

今年度、「道内避難者心のケア事業」では、4回の交流会を行いました。第1回交流会「ブラ歩き北海道★宮城を知るツアー」では、札幌にて宮城からの移住と開拓の歴史を紐解きながらゆかりの場所を巡るツアーを実施。前回のからから便りでその様子をお伝えしました。今回は、第2回〜4回の交流会のご報告です。

## ●函館で経験を共有する時間

11月6日（水）

函館市地域交流まちづくりセンター



福島県南相馬市から函館に避難・移住した加藤信子さんをゲストスピーカーとしてお招きし、原発事故による避難の経験をお話しいただきました。加藤さんは、当時勤めていた精神科病院で地震と原発事故に遭いました。原発事故後、病院には外部から避難に関する連絡もなく、テレビからの情報で避難指示が出ていることを知りました。そこから、100名以上の患者さんとともに避難に向けた準備が始まり、患者さんたちの受け入れ先のあてもない中、いわき、会津の避難所を巡り、最終的に患者さんたちが東京の病院に転院できたのが3月19日。発災後一度も家に帰ることなく辿り着いた東京。そこから、加藤さんを含め、同行した職員の避難がはじまった、という壮絶な経験です。

交流会には、函館市民19名に参加いただき、加藤さんの話に耳を傾けました。「病院の対応について関心を深めなければ、と思った」「直に話を聞くことの大切さを感じた」という声や、医療関係の方からは「病院ならではの苦労がわかる」といった声もあり、今

後もこういった機会があれば参加したい、という方が多くおられました。

## ●旭川で経験を共有する時間

11月30日（土）

旭川市ときわ市民ホール研修室

旭川では、避難移住された方4名と旭川市民11名の参加でした。2012年に製作されたドキュメンタリー映画「フクシマ後の世界」を上映し、震災・原発事故直後の人々の不安、葛藤、社会に与えた影響などを皆で振り返るとともに、避難移住された方々のお話をうかがいました。

映画からは、当時の県内に暮らしていた方々の思いにふれ、また、海外の専門家の見解、国内での社会現象など、さまざまな側面を知ることができました。そして、茨城県、福島県、秋田県から旭川に避難移住された方々の経験から、大地震に遭遇したときのこと、原発事故が起きたことで、暮らしていた家に帰れないまま今に至る状況があること、区域外避難による様々な経験や思いを共有することで、実際に話を聞かなければわからないこと、伝えられないことがたくさんあることを、あらためて知らされる場となりました。

参加された市民からは「今年、津波被災地へ行き、被害の大きさ、たいへんさを感じてきたので、今日は原発事故のことも知りたいと思い参加した」「(自分も)風化しないように伝えていきたい」、そして、函館と同様に、「機会があれば、こういった場で話を聞きたい」、という方がほとんどでした。



## ●年末恒例 年越しもちつき交流会

12月21日（土）

市民活動プラザ星園（札幌市）

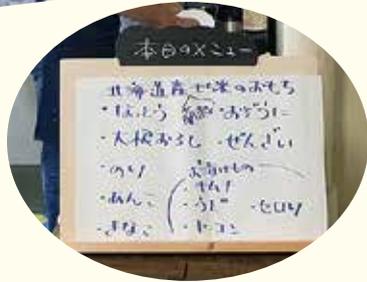
今回で8回目となった、もちつき交流会。今年の参加は、宮城県、福島



**12月21日(土) 10時~13時**  
 参加費：大人 500円、小・中学生 200円  
 定員：20名  
 持ち物：エプロン・三角巾  
 東日本大震災より避難された方々を対象に2017年に開催された「例年恒例越しつき会」が、今年も開催されます。協力団体のG.G.ファームと共同で、年末恒例行事を実施します。久しぶりの帰郷の機会でもあります。10時から11時半まではお雑煮作り、11時から13時は、みんなで近況報告をしあう光景がみられます。そして、ふかしあがった北海道産餅米を次々とついでには、みんなでお雑煮をいただきます。お雑煮、おしるこ、きなこ、納豆など、様々な味で楽しみました。「美味しいからつい食べ過ぎる」と、みんなお腹いっぱい。おみやげのおもちは、みなさんのお正月のお雑煮になったことと思います。



県、茨城県など各地から避難移住された方々15名、もちつきの準備やボランティアで参加した方は17名と、にぎやかな時間となりました。札幌では、なかなか参加できる場が少ないもちつき大会。2012年の12月、「慣れない避難先で、年末の恒例行事であるもちつきを楽しめる場を」と、G・Gファームの皆さんが避難された方を対象にはじめました。はじめた頃は幼い子ども



たちがたくさん参加していましたが、すこしずつ子どもへの参加は少なくなり、年月の経過を感じつつ、会場では、久しぶりに会う方同士の会話が弾んだり、近況報告をしあう光景がみられました。そして、ふかしあがった北海道産餅米を次々とついでには、みんなでお雑煮をいただきます。おしるこ、きなこ、納豆など、様々な味で楽しみました。「美味しいからつい食べ過ぎる」と、みんなお腹いっぱい。おみやげのおもちは、みなさんのお正月のお雑煮になったことと思います。

もちつき大会をコーディネートして下さっている北海道ふるさと回帰支援センターの佐藤さんは、「今年の年末にも開催する！」と仰っていますので、楽しみにしててください。

## 避難元からの情報 福島県からのお知らせ

## 令和2年度 福島県復興公営住宅の入居者募集について

復興公営住宅の入居者の募集を下記の日程で行います。

### ●対象の方

- ・避難指示区域等から避難されている方
- ・避難指示が解除された区域に平成23年3月11日に居住していた方
- ・東日本大震災で被災された「地震・津波被災者」の方
- ・子ども・被災者支援法に定める「支援対象避難者」の方

※いずれの方も住宅に困窮していることが要件となります。

▼募集の詳細(対象団地、応募要件等)は、福島県復興公営住宅入居支援センターへお問い合わせください。また、入居支援センターのホームページ等でも詳細をお知らせします。

募集期間及び入居予定	
第1回	令和2年4月2日(木)~4月10日(金) →6月以降入居予定
第2回	令和2年6月1日(月)~6月9日(火) →8月以降入居予定
第3回	令和2年8月3日(月)~8月12日(水) →10月以降入居予定
第4回	令和2年10月1日(木)~10月9日(金) →12月以降入居予定
第5回	令和2年11月26日(木)~12月4日(金) →2月以降入居予定
第6回	令和3年2月1日(月)~2月9日(火) →4月以降入居予定

問い合わせ：福島県復興公営住宅入居支援センター

☎024-522-3320

復興公営住宅 入居

検索



# 北海道開拓の歴史から

## 江別市・世田谷地区

江別市の開拓は、2020年（第162回）直木賞受賞作『熱源』（著：川越宗一）の舞台にもなっている対雁地区からはじまっています。が、その入植から78年後、戦災を契機として集団移住をした場所がありました。

江別市世田谷地区。その地名は、故郷の世田谷区から名付けられています。なぜ、世田谷区の方々が江別市に来ることになったのか、そしてどのような生活を経験し、今につながっているのか。その歴史を、今回は追ってみたいと思います。



### ■戦災と移住

第二次世界大戦の東京。

1945年3月10日の東京大空襲など幾多の空襲により、全焼家屋80万戸以上、罹災者300万人以上、死者10万人以上の被害に見舞われました。こうしたなか、戦災者の多くは縁故疎開しまし

たが、防空壕を住宅に仕立て直した壕舎で生活を続ける人も多かったようです。その理由の多くは、「行くところがない」ということで

あったことから、政府は「戦災者北海道集団帰農計画」を立案しました。それは、戦災者の疎開の目的と、深刻化する食料難を打開しようとする目的とが混然となって推進された政策でありましたが、表向きは募集に志願した方々の自発性による移住でした。

しかし、国家が決定した戦争によって生活基盤を失った方々の移住であり、根源的には強いられた移動であったとも見る事ができるものです。

1945年7月6日、「拓北農兵隊」と命名された北海道への集団帰農者197世帯932名は、東京を出発しました。8隊に分かれた集団帰農者は、江別町のほか、手稲村、琴似町、豊平町、札幌村、白石村、角田村（現在の栗山町）などの地に入植したのです。

### ■東京都世田谷区から 北海道江別町へ

1945年7月9日の早朝、野幌駅に世田谷区民33世帯が到着しました。野幌駅前にある天徳寺にて、受入式と農家との顔合わせをしたあと、受け入れ先の農家がある西角山地区と対雁地区に向かいました。それから、世田谷の都市住民であり、大学講師、画家、俳優、音楽家、職人など、農業とは無縁だった人たちが、極寒の原野を開墾していきました。

割り当てられた土地に、原始林から切り出した木材を運び、周囲から取った茅や葦を屋根や壁にして、急場の雨風を凌ぐ住宅を建設するも、年内に入居したのは10世帯。農作業は、泥炭地と格闘する日々。暗渠、客土などの必死の土地改良の末、農業が軌道に乗るまでに10年の歳月がかかったそうです。

1956年3月12日、苦難を乗り越えて拓かれた江別市世田谷に電灯が点りました。今から64年前

このことです。明るくなった家のおかげで、元・世田谷区民の方々は幸せを感じたそうです。世田谷から入植した方々には、文化人・知識人が多く存在したため、このあと急速に発展する江別市のなかで、芸術文化活動など、江別市の振興に大きな功績を残したことも、特筆すべき点です。

### ■ 続く故郷とのつながり

世田谷区民が野幌駅に降り立ったその日を「入植記念日」として、毎年7月9日に祝賀会が開催されています。40周年のときには、当時の世田谷区長が来江し、式典に参加しており、そのことは、記念碑にも刻まれました。

最初に入植した33

世帯は、入植二世の6世帯となりましたが、2015年には70周年を迎え、その式典には約60人が出席し、現在も親睦を深めているそうです。

2019年1月26

日〜2019年3月10日には、世田谷文化生活情報センター・生活工房（東京都世田谷区）で、『新雪の時代―江別市世田谷の暮らしと文化』と題した展示が開かれました。2月17日には、江別市世田谷の開拓者であり、絵画活動

終戦間もなく共同で立てた集会所「世田谷倶楽部」。当時ここで、文学・思想・詩・音楽・書道・英語などを子どもたちに教えていた。



や演劇活動においても新天地を切り拓いた山形トムさんがゲストとして招かれ、トークイベントが開催されました。こうして、世田谷区と江別市世田谷の交流は、今も綿々と続いています。

「世田谷倶楽部」前にある、世田谷区長の名前が刻まれた碑。



昭和60年7月2日 世田谷40周年祝賀会での世田谷区長とミス世田谷。(写真提供：江別市)



### 〈参考〉

木村豊『空襲で焼け出された者の記憶…ある「拓北農兵隊」の戦時と戦後をめぐって』  
江別市『広報えべつ』（2015・9）

世田谷のある江別市角山地区の電化は、江別市街の電化が始まってから42年後でした。





# 寄稿 1ページのたより

## ももちゃんは

### 逃げてきたんでしょ？

小学3年生の娘が同級生に言われた言葉です。そう言われて、詳しくわからない娘は『…そうだよ』と返事をしたそうです。

あの3月11日、私たち家族は主人の実家がある宮城県・大崎市に行っていました。自宅は福島県・大熊町です（原発事故があった原子力発電所から3キロ圏内のため現在も帰宅困難区域）。当時、1才になり歩けるようになった娘を祖父母にお披露目しようと、楽しい時間を過ごしていました。

地震がきたとき、娘はお昼寝をしていました。揺れを感じ、寝ている娘を助けに行く主人は、転びそうになりながら娘を毛布でくるみ、なんとか外へ出ました。私は祖母の腕を抱えて玄関から外へ行くと、見慣れた景色、田んぼや民家、電柱などが波打つように揺れ動いていました。余震が絶えず、揺れも大きくてそこから動けません。とりあえず、車に乗りました。娘

を抱きかかえると小刻みに震えています。車内のモニターでテレビを見ると、津波が太平洋側に押し寄せていました。

私たちの自宅は危ないかも…私の実家は、大熊町の隣、富岡町でした。みんな大丈夫だろうか…電話もつながらず、津波の被害も想像できるものではないし…私たちは、お泊まり用に準備した程度の荷物しかない…ミルクやオムツ…どうしよう…など、心細く、とても不安な日々を過ごしました。

原発事故もあり、慣れない毎日です。私たちはお風呂に入れず満足な食事ができなくても、子どもにはそんな思いはさせたくないと、気を張っていることが精神的に苦しかったです。

発災から二週間が経ち、まだ宮城の実家から動けず、大熊町に帰ることもできなくなりました。

主人の勤め先から連絡があり「福島はもうだめだ、グループ会社でまた頑張っしてほしい」ということで、転勤した先が北海道でした。

「お泊まりの準備」程度しか荷物が無い私たちには、北海道の生活はゼロからのスタートでした。

あれから一度も、大熊町の自宅には帰っていません。北海道の生活仕事、娘の環境を大切にしたい思いもあり、その後出産をして5人家族になりました。我が子を連れて線量の高い場所へ行くことは考えられず、福島は遠い場所になっていました。

しかし、子どもたちは3月11日が近づくと、私たちの会話やテレビなどを聞きながら、聞いてくるようになります。『私の生まれたところだよね？』『どうなっちゃったの？』と。帰国困難と伝えても、やはり私の思いの多い場所であり、ふるさとはです。行って見たいけれど行けな

い、あの日から止まっている記憶と、北海道に来てから進んでいる毎日の中で、子どもたちにどう伝えたいのか、わかりません。止まっている記憶を子どもたちと共有できるのか…わかりません。でも、あの日から止まっているのは私だけなのかもしれません。

娘が同級生に言われたひと言に返事ができるように、私たちが子どもたちに伝える方法を考える必要がありました。進んでいかなってはいけな

（ペンネーム：北キツネ）



### 懐かしいふるさとと、ともに…

あの大変な東日本大震災から9年…娘も10歳。ずいぶん大人になったなあ…  
「逃げてきたんでしょ？」の一言が気になってるのね。  
「おねーちゃん、どしたの？」

ああー故郷に戻りたいなあ。海や山も、きれいだっただな。懐かしいな…  
「よし！私たちの大切なふるさとだもの！ももやママがおねーちゃんに福島のことを伝えられるように、考えようね！」



月日が経ち、ご家族の生活状況が当時から変わった方もおられると思います。誰でも一度は関わりを持つであろう高齢者福祉制度やサービス。必要に迫られないと、なかなか考える機会がないことですが、直面すると、いろいろな言葉や仕組みがあつてわかりにくく、不安を抱え込んでしまいがちです。今回は「もしも」のときの予備知識として、高齢福祉、サービスについてご説明します。

## ■「もしも」その① 相談先

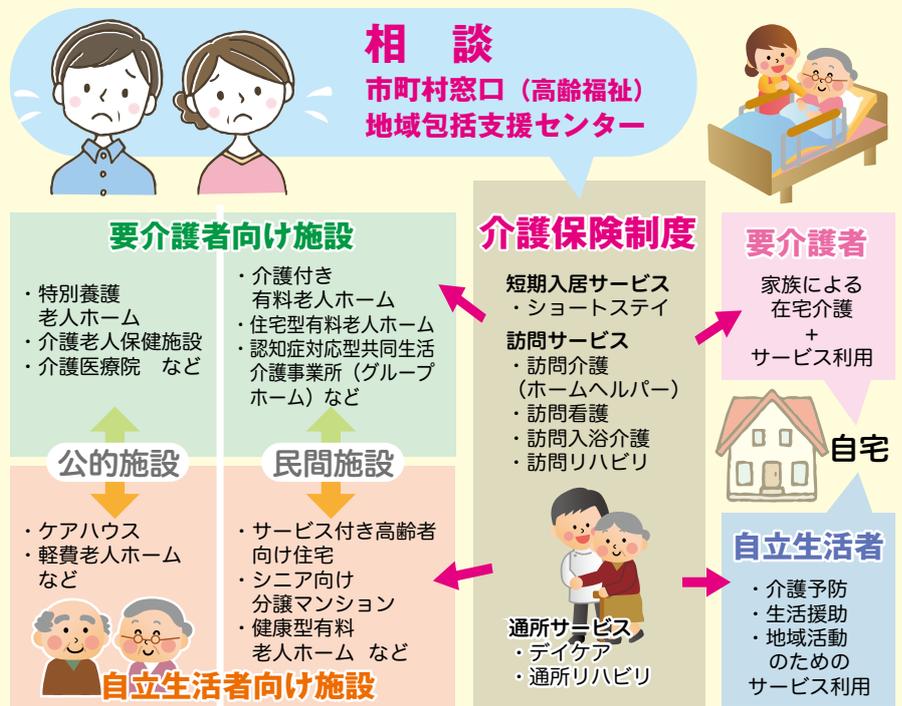
相談先として挙げられるのは、市町村窓口や地域包括支援センターです。地域包括支援センターは、65歳以上の方の暮らしを地域でサポートするための拠点として設置されている機関です。住み慣れた地域での生活を継続できるよう、必要なサービスが提供される環境を整えることを目的としており、保健師、社会福祉士、ケアマネジャーで構成されています。もし、離れて暮らす家族について相談したい場合は、家族が住んでいる市町村の地域包括支援センターに相談します。

## ■「もしも」その② 介護保険制度

通所（デイケア、リハビリなど）、訪問（介護、入浴など）、短期入所、福祉用具や住宅改修補助などの介護サービスを受けるには、要介護認定を受けることと、ケアマネジャーにケアプランを立ててもらう必要があります。ケアマネジャーを探すには、地域包括支援センターや市町村の介護保険課に相談します。介護認定は、市町村窓口申請後、訪問による認定調査を受け、約1ヶ月で要介護度（要支援1～2、要介護1～5）が決まります。

## ■「もしも」その③ 高齢者向け福祉施設

自宅で介護サービスを受けながら暮らすほかに、サービスのある住宅や施設に入居する場合、要介護度や目的、料金などにより選択肢が分かります。介護が必要な状況であれば、介護サービスが受けられる施設、介護までは必要ないが、一人暮らしや高齢世帯では不安、という方向けの住宅や施設があります。仕組みがわかりにくいこともあるので、ケアマネジャーなどに相談しながら考えることをおすすめします。



久しぶりに会った家族や親戚が、「福祉サービスや施設の利用が必要な状態？」と心配に感じたときは、早めに市町村の窓口や地域包括支援センターに相談する事をお勧めします。家族での話し合いや、早めの備えは、周りの家族と本人が、余裕をもって生活を続けることにつながると思います。問い合わせ先など、わからないことがありましたら、北海道NPOサポートセンターまでお気軽にお問い合わせください。

# 北海道における被災避難者の受入状況

[2020年1月14日現在]

※北海道のホームページでもご覧になることができます。



単位：人

	岩手県	宮城県	福島県	その他	合計	
空知	岩見沢市	1	8	13	0	22
	他9市町村	0	6	20	0	26
石狩	札幌市	18	170	479	105	772
	江別市	4	14	36	0	54
	千歳市	3	16	17	0	36
	恵庭市	0	0	33	0	33
	北広島市	0	2	13	4	19
	他2市町村	0	1	7	0	8
後志	小樽市	0	4	17	9	30
	他5市町村	0	3	7	0	10
胆振	苫小牧市	4	19	10	0	33
	他5市町村	0	10	15	0	25
日高	2市町村	0	0	7	7	14
渡島	函館市	6	31	79	17	133
	北斗市	2	4	15	0	21
	他2市町村	0	0	7	0	7
檜山	3市町村	1	6	2	0	9
上川	旭川市	5	26	50	9	90
	他10市町村	3	8	16	9	36
宗谷	1市町村	0	0	0	1	1
オホーツク	北見市	0	2	13	0	15
	他6市町村	0	4	12	0	16
十勝	帯広市	4	3	18	3	28
	他1市町村	0	0	1	0	1
釧路	釧路市	3	17	11	8	39
	他1市町村	0	0	1	0	1
根室	1市町村	0	2	0	0	2
総計	62市町村	54	356	899	172	1,481

## 避難者相談窓口

### NPO 法人 北海道NPOサポートセンター

電話：011-200-0973

平日 10:00 ~ 17:00

FAX：011-200-0974

メール：info@hnposc.net

〒064-0808 札幌市中央区南8条西2丁目5-74  
市民活動プラザ星園 201



地下鉄東豊線 豊水すすきのの駅6番出口  
地下鉄南北線 中島公園駅1番出口

## 全国避難者情報システム「ふるさとネット」の登録について

「からから便り」は「ふるさとネット」の登録情報をもとに発送しています。「ふるさとネット」は北海道が運用する被災避難者サポート登録制度です。この制度は自治体の転出入届とは連動しておらず、転居の場合は住所変更のご連絡をいただかなければ、郵送物が「所在不明」として返送されてしまいます。転居、登録解除など、「ふるさとネット」の登録内容に変更がある場合はご連絡ください。

### ■連絡先

- ① NPO 法人 北海道 NPO サポートセンター
- ② 北海道総合政策部地域振興局地域政策課地域政策グループ  
電話：011-204-5800  
メール：shienhonbu@pref.hokkaido.lg.jp
- ③ 避難先市町村の担当窓口（市町村により部署が異なります）

## 編集後記

今年度最後となる「からから便り」第4号の発行となりました。第4号では10~12月に開催した交流会の報告を掲載しています。同じように避難をした方にお会いしたい、と交流会に初めて参加した方もいました。月日が経っても、その時々のお悩みや心配があるのだと痛感しました。今年度の「からから便り」は終了となりますが、当法人の相談窓口は引き続き開設しています。何かございましたらご連絡ください。

(定森)